



世田谷区立砦中学校 一年 宮本 瑠子

つながっているまち、東京。

「これも何かのご縁だから。」祖母の口癖だ。人に対しても物に対しても「縁があつて」の出会いだという。

昨年の夏、私は初めて転校した。東京都内での移動ではあつたが、環境はガラリと変わった。「その学校にご縁があつたのよ。でもコロナだからね。ディスタンス、ディスタンスで袖振り合うこともないわね。」と祖母はいつもの調子だ。「のん気な言い方しないで。こっちは友達できるかな…とか小六だし…心配な材料いっぱいなの…。」と私は期待よりも不安が少しまざつた気分だつた。

転校して二日目に図書館へ行つた。私は夏目漱石のコーナーへ直行する。「I love you」を「月が綺麗ですね。」と訳したエピソードを知つて以来、漱石

な「あの時は、嬉しかった。」「ほつとした。」「ほんと、あの時はありがとう。」と恵ちゃんが声をかけてくれたときのことを振り返る。すると恵ちゃんは「ご縁があつたのよ。」「!?」どこかで聞いたセリフだ。「ご縁!?」私が聞き返すと恵ちゃんは照れくさそうに答えた。「うちのおばあちゃんがよく言うのよ。新しい友達ができたよつて話すと、ご縁ねーつて。だから私もそう思うようになったよ。」「えー!? 私のおばあちゃんも同じこと言うよ。」私と恵ちゃんは、意外な所でも波長が合った。日本語を勉強中のコダコーダさんはすぐに辞書で『縁』を調べた。『袖振り合うも多少の縁』ということわざを見つけ、「ステキな意味の言葉ですね。でもムズカシイ、ムズカシイ…。」とあんまり言うので、内藤さんが「意味はよくわかっとなるんやから、ええんちゃうの?」とみんなの笑いをとつた。そんな話をしているうちに、転校生やぼつんとしている人に声をかけようということがこのグループの目標のようになり、「ご縁があつた会(温かい)」と誰からともなく呼ぶようになった。『誰ひとり取り残さない』SDGsの原則にもなっていると自画自賛したりもした。

こんな五人がそれぞれ違う中学校に進学することがわ

の小説と月を見るのが好きになった。「漱石、好き?」と声をかけられた。私の返答をまたずにその声は続けた。「私は六の二の高市恵。あなた、転校生でしょ。教室で紹介されるとこ見たよ。クラスが違うけどよろしくね。」「私、宮本瑠子。こちらこそよろしく。」このやりとりが、一人の転校生の気持ちをどれほど楽にしただろう。この恵ちゃん自身、お父さんの転勤で転校が多く、誰かが声をかけてくれて「ありがたい。」と思つた経験から、自分も転校生を見かけたら話しかけるようになったそう。実際、恵ちゃんに声をかけてもらった元転校生たちと私も仲良くなった。四年生の時にインドから帰国したマヤ、昨年スリランカからやって来たコダコーダさん。数カ月前に大阪から引越して来た内藤さん、みんな

かつたときは、さみしくなつて泣いてしまった。でも「袖振り合うも…」の気持ちをもつた五人が、別々の場所での気持ちを展開できることは、それはそれでいいことだというところで落ち着き、私達なりの使命感みたいなものを抱いて春を迎えた。恵ちゃんは家族でイギリスへ行くことになった。出発する前日に二人で話をした。「ところで瑠子、どうして漱石が好きなの?」と聞かれ、私は例の「月が綺麗ですね。」の話をした。恵ちゃんも同じ理由で漱石の小説が好きだといい、ここでも波長が合ったと二人で笑つた。

春休み祖母から電話があつた。「お友達の高市さん、息子さんの転勤でお孫ちゃんがイギリスに行つてしまつてね…。」私の祖母と恵ちゃんのおばあちゃんは、大学時代からの友達だったのだ。田園調布の下宿で二年間一緒だったという。初めて交わした会話は、下宿の縁側で「月が綺麗ですね。」だったそう。

人と人がつながっているミラクルな都市東京。明日の東京もきっと、いろんな人達のいいご縁で満ち溢れていることだろう。

※登場人物は仮名です